

優秀賞

踏み出す

東京都 光塩女子学院高等科一年 秋元遙香

親友であるということが一体どんなことであるのか。そんなこと私は今まで考えたことがなかった。ただいつも当たり前と一緒にいた。登下校の電車、部活、習い事。共に笑い共に泣き、言つまでもなく無くてはならない存在で私は彼女と一心同体だった。

そんな中三のある日、私の親友は突如、学校に来なくなってしまった。いわゆる不登校だ。私は始め、そのことをさほど気に留めていなかった。神経性の胃炎だと聞いていたが特に深刻に考えず治ればまた元気に学校に来ると疑う

つかり穴があいてしまった感覚で、常に彼女のことを頭から離れることはなく、毎日どこか無気力になった。

そこで私は周りの友達や先生や先輩に寄せ書きを書いてくれるよう頼んで歩いた。ただ大切な親友がこれをきっかけに学校に来られたら、と必死だった。中には個人的に彼女に手紙を書いて下さる先生もいらして嬉しかった。だけれど結局、私の切実な願いは伝わりつつも、叶わなかった。

この頃から私は彼女との関係が静かに変化してしまっていたことに気づき始めた。何となく心に心がすれ違っているような、食い違っているようなそんな不安を抱いていた。それまではケンカさえ一度もしたことがなかったのに、ち

までもなく信じきっていた。というよりも、もしかしたらその親友の変化と対峙するのが単に怖かったのかも知れない。いずれにしても不登校だとは思っていなかった。

ところがそうではなかった。何日経っても何週間経っても学校に来なかった。私がいくら働きかけたところで何も変わらなかった。時間がすぎていく度に私は何とも言い難いもどかしさに駆られた。数カ月も経つとだんだん出席日数の不足で高校進学さえ危ぶまれてきた。もどかしさに、焦りが加わった。私は生活の中にほ

よっとしたことですぐに口論になることがしばしばで、一緒にいても楽しくないこともあった。親友のはずなのに、という思いがいつも頭の中で反芻された。自分の無力さを痛感した。何もできない自分が情けなかった。自己嫌悪に陥り、なぜか不合理な怒りがこみ上げてきて彼女を心配する先生にやり場のない怒りをぶつけてしまうこともあった。

様々な思いが交錯し、葛藤しているうちに遂に卒業式の日を迎えた。この日もやはり私の親友は登校しなかった。卒業なんて全く嬉しくなかったしむしろ苦痛だった。楽しかった思い出は、もつ過去の記憶でしかないのに、それを分かっていながらも現実逃避したい一心で周囲の助言や励ましも耳に入らなかった。漠然とし

ていたけれどそれでいて確実だったはずの、一番大切だった友情を否定された気がして辛かった。別の高校に通うことで物理的に離れてしまつ寂しさよりも肉面的に、心理的に離れてしまつてそれでそれが何よりとつてもなく恐ろしかった。いと簡単に惜しげもなく壊れてしまうような儚い友情だったのかと思う度、後悔と罪悪感で心が溢れた。

時間が経過して、私は高校生になった。新しい生活を始めても、頭の片隅には未解決の問題があった。そのことを考えていると涙が止まらないこともあった。責任も感じた。彼女のためと思ひ僅かにしてきたこともひよっとしたら自分のためにしてきたことではないのかもしれない。せめて感謝の言葉くらい言いたかつ

た、という悔やみきれない気持ちは喉に刺さつた骨のようで私はいつまでも後悔から抜け出せずにいた。

しかし、そんな埒の明かない毎日に区切りをつける日がやってきた。彼女の誕生日、私は思いきつてこんなメールを送ってみた。「中学の時はどうもありがとつ。私はあなたのおかげで三年間充実してたし楽しかつたよ。」するとこんな返信がきた。「私も同じ。本当に親友になれてよかつた。」と。突然の意外なメールに私は驚き、嬉しさと爽快感でいっぱいになって、止め処もなく涙がこぼれた。心の底から湧き出る感動と幸せに包まれ、かつてない喜びに浸つた。

私はこの様な貴重な経験を通じて、通じ合う

に、日々試されているのだと思う。

ことの喜びを実感しただけでなく通じ合えるという人間にとどまらない尊い能力に心打たれた。また、支えられて生きているのだという生きとし生けるものの精髓部分を改めて発見できたと思う。友達、親や先生、そしてかけがえない親友。数え切れない思いやりのもとに私は生かされている。

些細な感動でも、それは私達の心を満たし、対人関係さえも改善していくに違いない。生きていけば、いつか必ず過去を振り返りたくなつたり前に進むのが辛くなる時もあると思う。そんな時きつとこんな経験が思い出され、私を励ましてくれるような気がする。いかに能動的に感謝感動できるか、つまり人生を豊かにできるかということとは運なんかではなく私達の日常

